

週日の説教

金 大烈 神父 2010年11月13日(土)

《正義と愛 - 先ず愛があって、正義がある - 》

今日の福音(ルカ 18:1-8)の不正な裁判官とやもめの話は、よく知られた物語です。

この話の中では、やもめが裁判官に助けを求めている理由は何も説明されていません。この福音でイエス様が強調しているのは、「この裁判官のような不正な者でさえ執拗に願えば聞いてくれるのだから、昼も夜もいつも私たちを見つめていらっしゃる神様が聞いてくださらないはずはない。だから絶え間なく祈りなさい。」というメッセージです。

今日の福音を読んで、思い出した言葉が二つあります。それは『正義』と『愛』です。『正義』という言葉も『愛』という言葉も皆様はよくご存知だと思います。聖書の中でもよく使われています。しかし、『正義』という言葉と『愛』という言葉は、相容れない感じがします。『正義』という言葉には、「間違えたものを裁き、正しく戻す」というような、ある意味では冷たく思われる感じがあります。一方、『愛』という言葉には、「どんなに悪いことをされても赦さなければならない」という感じがあります。だから、『正義』という言葉と『愛』という言葉には矛盾が感じられます。しかし、旧約聖書、新約聖書のあちこちには、「神様は愛の神様であり、正義の神様である」という言葉がよく出てきます。私たち信者は、この『正義』と『愛』の心をどのようにバランスをとって生きればよいのでしょうか。

大体私たちは、自分に都合のよい解釈をします。ある時には、『正義』を強調します。しかし、自分が不利な条件に陥ると『愛』を求めます。そしてそれぞれの人の性格によっても違います。ある人はとても冷静で、間違いをはっきりさせ、正しいことを求めようとします。逆に、何でも受け入れて、何でも理解してくれるような愛にあふれた性格の人もあります。このような性格の人が一緒にいると、必ずぶつかります。

では、どう考えればよいのでしょうか。『正義』と『愛』には、**順番があります。先ず『愛』があり、それに基づいた『正義』があるのです。**『愛』が土台になっていない『正義』は利己主義でしかありません。絶対に正しい道を歩むことはできません。必ず道はずれます。先ず自分の中に『愛』にたいする体験がなければ、『正義』という言葉は使えません。人類の歴史を振り返ってみると、『正義』という名によってとんでもない間違いを犯して来たのが分かります。『正義』という言葉を使う前には、先ず母の心のような体験が必要です。それを今日の福音をとおして黙想してみました。

神様の『正義』は神様の『愛』から出るものです。だから神様は、悔しい気持ち、悲しい気持ちの人々をそのままにしておかない、ということを今日の福音はあらわしています。

世界のいろいろな動きを見ると、困難な気持ちになる時があると思います。日常生活の中の小さなことでも、これは正しいのか正しくないのか、迷うことがあると思います。

たとえば、お金や物を求める人が毎日のように来ています。その人々に、要求どおりにお金を渡す

のが正しいのかどうか、悩んだ経験をお持ちの方も多いでしょう。その時の基準は、『愛』です。頭のいい人は、「お金をあげるのはこの人のためにならない。この人はいつまでも物乞いする人生になってしまう。だから、この人が自分で働くように冷たい態度をとる。」という人もいます。しかしそれは、100パーセント嘘です。本当に相手のことを考えて対応する心があれば、そのような言い方や振る舞いは見せないでしょう。何とかその人のために方法を探そうとするでしょう。お金をあげるのが役に立たないと思ったら、それ以外の解決策を探そうとするでしょう。しかし私たちは、お金をあげるのは役に立たないから、と言いながら追い出してしまうことがほとんどでしょう。そして、よく考えてみると、『正義』という言葉を使いながら、実は正しくない心で対応したのではないかという反省もできます。これは私自身にもあてはまる話です。

子どもの教育も、隣人への接し方も同じです。全ての関わりが同じです。先ず本当に相手に『愛』を持って、その人のためにこのようなアドバイス、言い方をしたのか、いつも振り返ろうとすることが必要です。そうでなければ、いつも私たちは同じことを繰り返してしまうと思います。

今日の話の結論は、イエス様が紹介された御父は『愛』のもとだということです。その『愛』の表現の一つが『正義』なのです。その『正義』は、人を裁く、人を滅ぼすためのものではなくて、人を生かすためのものであることをもう一回意識しましょう。

ありがとうございました。